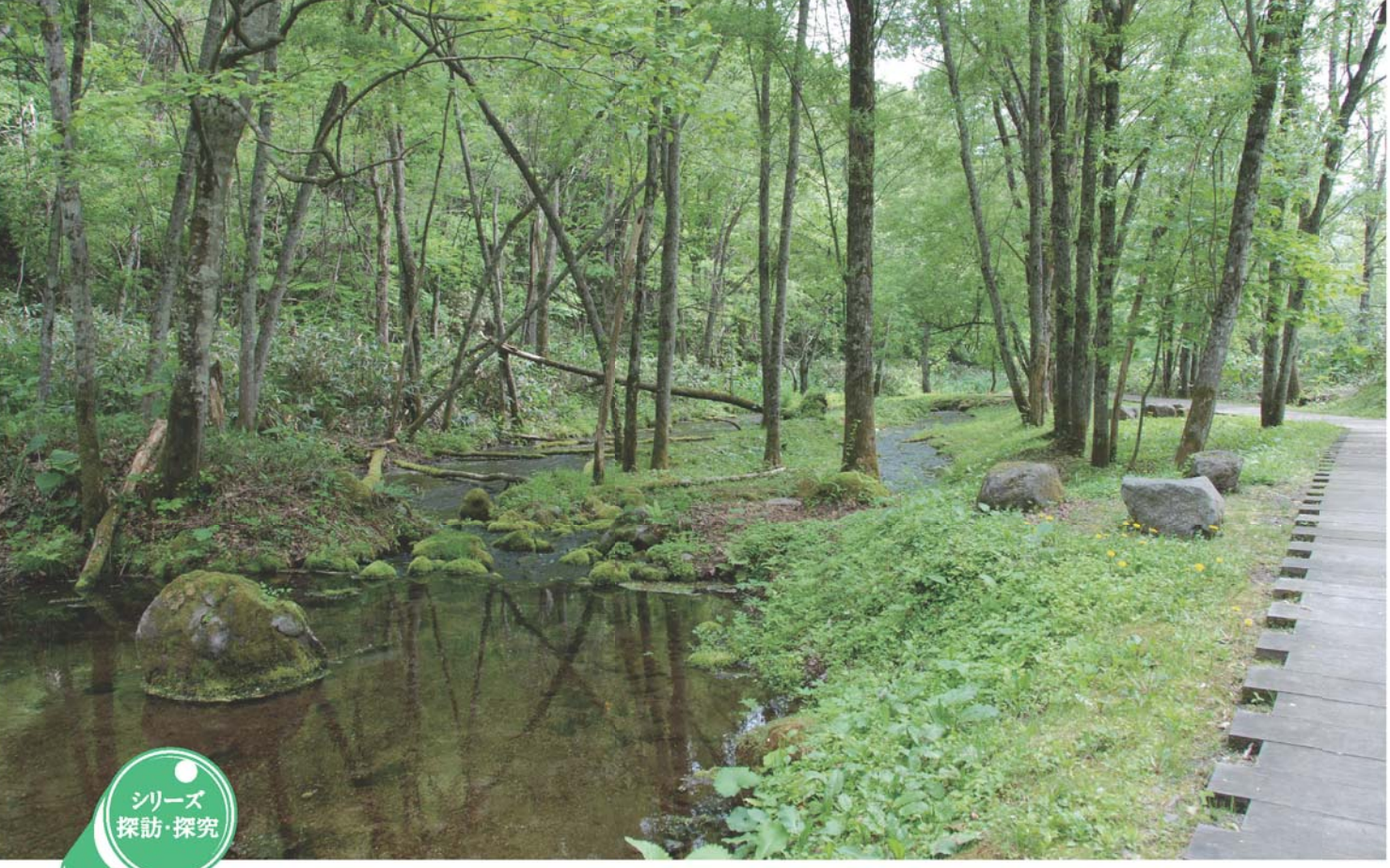

シリーズ
探訪・探究

訪れたいまち

第10回 北海道上川郡東川町

写真映りのよい町づくりと人づくりを実践し、「“水のめぐみ”とふれあう水の里の旅コンテスト2011」で特別賞を受賞した、上川郡東川町を訪れてみました。

「写真の町」宣言

昭和60年頃、全国の市区町村が地域おこしのため〝商品開発〟にしのぎを削る中、東川町はモノではなく「写真」という文化を選ぶ。

「『自然』と『人』、『人』と『文化』、『人』と『人』それぞれの出会いの中に感動が生まれます。そのとき、それぞれの迫間に風のようにカメラがあるなら、人は、その出会いを永久に手中にし、幾多の人々に感動を与え、分かちあうことができるのです。（中略）この恵まれた大地に、世界の人々に開かれた町、心のこもった〝写真映りのよい〟町の創造をめざします」（抜粋）

昭和60年6月1日、写真の町宣言。写真を核とした町づくりが始まった。

自治体独自の「東川賞」という写真作家賞を創設し、毎年「国際写真フェスティバル」を開催している。その開幕を飾る全国高等学校写真選手権大会「写真甲子園」には、第18回目の今年、過去最多の403校の応募があった。

少子高齢化が進み、平成5年に7千人を切った人口は、平成23年現在7千8百人。幼保一体型の「幼児センター」や東川風住宅が連なる「グリーンヴィレッジ」の整備などをきっかけに、大都市や周辺地域からの移住者が増加している。

写真の町とはいったいどんな町だろう？

全てが絵になる美しい町

東川町は、北海道のほぼ中央に位置し、大雪山国立公園の山裾に広がる。旭川空港から町の中心部にある道の駅まで車で約10分だった。〝野生動物の飛び出しに注意〟と書かれた地図を見て、北海道に来たことを実感する。

忠別川沿いを走り、最初に天人峡に向かう。見上げるばかりの柱状の絶壁は壮観そのもの。高さ270mの「羽衣の滝」は、優雅な名前に似合わず迫力があった。

その後、北海道の最高峰旭岳へ。ロープウェイの「山麓駅」の周囲に広が

三角屋根が並ぶ、「グリーンヴィレッジ」の緑豊かな町並み。

幼児センターのオブジェ「木とふれあい、木に学び、木と生きる」＝木育（もくいく）を行う。

る湿地は花が満開だった。日本で一番長い間、雪を楽しめる所だとガイドブックに書いてはあったが、「姿見駅」へ到着すると6月中旬だというのに一面の銀世界。思わず目を見張った。

案内カウンターに行くと、高山植物が咲いている場所や道の状態を地図で丁寧に教えてくれた。霧が出ても迷わないよう道にロープがはられ、旗を立ててあると聞き一安心。長靴を借り「姿見の池」周辺約一時間のコースを歩き始め、しばらく行くと登山装備をした女性が一人で歩いているのに出会った。ビジターセンターの職員だった。

「山頂の花がどのくらい咲いているかという問い合わせが多いので、今、頂上まで登って見てきたところです」

ホームページ上で、リアルタイムの山の状況や高山植物、野生動物の情報がわかるのは、こうした地道な働きのおかげ。訪れる人の安全と自然を守る重要な職務だが、なかなかできない大変な仕事だ。

第一展望台には、雲の切れ間を待つたくさんのカメラマンが。さすがに写真の町。キバナシャクナゲが咲き始めた山道で耳を澄ませば、硫黄が吹き出す音、澄んだ空気――。東京を発って4時間半、清涼とした別世界に包まれていた。

町へ戻る途中、「大雪旭岳源水」に立ち寄ると、源泉から引かれた源水岩の取水口は、水を汲みにきた大勢の人で賑わっていた。せせらぎの音を楽しみつつ、川沿いを歩くと岩の間から勢いよく水が湧き出している。

何十年とも何百年とも言われる長い年月をかけて浸透した雪が、天然フィルターを通って初めて出てくるという。水を手ですくうと冷蔵庫で冷やしたような冷たさ。口に含むと水が美味しいってこういうことか、と初めてわかった。東川町に上水道はない。全戸こんな地下水で生活できるとはなん

キトウシ山から臨む米どころ東川の田園風景。

道の駅ひがしかわ「道草館」。

●"水のめぐみ"とふれあう水の里の旅コンテストとは

国土交通省が水源地域などの地域活性化を目的に開催しているコンテスト。水源地域や水文化の保全などに取り組む地域を「水の里」と定義し、水の里の地域活性化につながる旅行企画を募集・選考するとともに、受賞企画については、本コンテストに協力する観光関連団体によるプロモーション活動を実施している。

旭岳(2291m)。アイヌの人は、大雪山を「カムイミンタラ―神々の遊ぶ庭―」と呼んだ。

旭岳の第一展望台。
心を動かされる瞬間を
捉えようとするカメラマン達。

「羽衣の滝」。雪解けの水が七段になって、岩肌をつたい落ちる。
「日本の滝100選」に選ばれている。

旭岳ロープウエイ「旭岳駅」周辺は、エゾノリュウキンカとミズバショウがいっぱい咲いていた。

旭岳ビジターセンターのスタッフ。「姿見駅」周辺で出会った田上さん(左)。
「東川は熊とも共存しています」と大塚さん(右)。

「カムイワッカシンブイと言うの。きれいな水が湧き出る穴という意味よ」優しい目をした安井さんの声は穏やかだった。多数の湧き水の出る所を各家庭で守る。

こんこんと1日に6600トン湧き出る。「平成の名水百選」に選ばれている。

という幸せだろう。

上川盆地に位置するため、気温は夏に30度、冬はマイナス20度にもなるというのに、水温は一年中6～7度というのも、山の神がもたらす神秘だ。

山の恵みを守り育て未来へ残す

生命の源、大雪山は深い渓谷を刻み、広大な樹海を育て、野生動物を生み、降った雪は川から海へ注ぐ。人間もその自然の一部であり、逆らっては生きていけない。人々は、山の恵みを大切に守り、慈しみ、開拓し、子ども達へ手渡してきた。それらを繋ぎあわせ未来へ残す「人」も素晴らしい。

ここ東川では一瞬一瞬全てがシャッターチャンス。自然と人と文化の絶妙な調和が美しい町だった。

移住してきたクラフトデザイナー達の工房が連なる。森林の中にカフェあり、ショップあり。

君の椅子（BAU工房）
「ようこそ。君の居場所はここにあるよ」子どもの成長を住民みんなで温かく見守りたいという願いをこめて、町で生まれた赤ちゃんに贈られる。名前と生年月日、通し番号入りの手作り。

Interview

地元で洋菓子店を営む傍ら、町おこしに尽力されている髙島郁宏さんにお話を伺った。

「POIRE ›月庵（ポワール てんげつあん）」
店主・髙島郁宏 氏
町の商工会青年部長、写真の町の企画委員などを歴任し、町をこよなく愛するパティシエ。

――東川への想いを聞かせてください。

先輩が創った文化を重ね合わせ、ゆるぎない文化を創っていきたい。全戸天然のミネラルウォーターで暮らしていることは町の誇りであり、町民の自慢です。

――お菓子を通じて新しい取り組みをされていると聞きました。

七夕にちなんだ「サマーバレンタイン」を北海道でも創りたいと考えいろいろ調べました。石狩川で繋がる7つの町※が、"夏の大三角形"を形作っていたのをきっかけに「夢のあることをしよう!」と倶楽部ラ・ボア・ラクテ（天の川）を設立。地域の仲間と商品開発を行い、ドライブラリーを企画しました。

――「地域統一ブランド」にまとめることは難しかったのでは?

これからの時代、一人勝ちはあり得ません。ネーミングは「ラ・ボア・ラクテ」、コンセプトは「出逢い・想いやり・感謝」、そして「地元産又は地元近くの素材を使う」ことだけを統一しました。素材が違うので、それぞれその土地に"物語"が生まれ、商品価値を上げていくと思います。

――これからの地域の将来像は?

このブランドを業種を超えて拡げ、地域全体を元気にしたい。例えば家具屋が「二人の椅子」を、お寿司屋が「天の川ちらし」を作ってくれたら楽しいと思います。

※東川町－旭川市－深川市－妹背牛（もせうし）町－滝川市－新十津川（しんとつかわ）町－砂川市

菓子屋として何ができるかを考え商品ラベルに"東川"を入れている。

木彫看板は木工の町を象徴する。

●「ラ・ボア・ラクテ」とは

「ラ・ボア・ラクテ」はフランス語で「天の川」の意味。織姫と彦星の物語から着想を得て、石狩川を天の川とみなし、石狩川が流れる旭川市（=織姫）・妹背牛町（=彦星）・東川町（白鳥座）を夏の夜空に輝く「夏の大三角形」に見立てている。

CLOSE UP

MLIT レポート

全国各地で働く国土交通省職員が地元を紹介します。

Reporter
北海道開発局
旭川開発建設部
特定道路事業対策官
加藤 博美

旭川開発建設部では、地域を愛する方々と協働して、「美しい景観づくり」「個性的で活力あるまちづくり」「魅力ある観光空間づくり」を目指す「シーニックバイウェイ北海道」の取り組みを進めています。

我々の地元の大雪・富良野ルートは、平成 17 年に国内最初のシーニックバイウェイルートとして認定されました。大雪山系の雄大な山並み、パッチワークのような丘陵農地や花畑などに代表される風景が魅力で国内外から多くの方々が訪れています。

現在、「四季を彩る花人街道」をテーマに、関係市町村2市6町1村(旭川市、富良野市、東神楽町、東川町、美瑛町、上富良野町、中富良野町、南富良野町、占冠(しむかっぷ)村)の 19 団体(NPO、商工会など)と自治体が、総延長約 100 キロの沿道の清掃活動や植栽など沿道景観の整備に参加しています。

ところで、みなさん「ウインターサーカス」を知っていますか? このイベントは、"デザインしたゆきのかたまり"にプロジェクターやライトによる演出を行う、地元の方々とアーティストが地域資源を活用した「雪の芸術活動」です。会場では、温かい飲食の提供や各種イベントが行われ、昨年は大雪・富良野ルート内に設けられた 7 つの会場を全て周遊するバスツアーも開催され大盛況でした。"ゆきのランドアート"のシンプルで幻想的な造形美を楽しみに冬の北海道にもぜひ、お越しください。

●シーニックバイウェイ北海道 (Scenic Byway HOKKAIDO)とは

景観・シーン(Scene)の形容詞シーニック(Scenic)と、わき道・寄り道を意味するバイウェイ(Byway)を組み合わせた言葉。国土交通省が実施している道路施策の一つ。

地域がつくり育てる北海道の風景。
道がまちの魅力と心を繋ぐ。

奥山三彩 作「voyagi」
(上富良野 見晴台公園会場)
©菊地晴夫

昼に撮影した「ゆきのかたまり」。
雪が溶けてなくなるのもアート。

冨田真美 作「ゆきのかたまり」
(旭川 西神楽会場)
©菊地晴夫